

フォーラム・セミナー報告

第3回関西大学FDフォーラム 対話で育てる「論理的思考」を開催しました

「論理的思考」や「批判的思考」は、いわゆる「ジェネリック・スキル」や「キー・コンピテンシー」と呼ばれる基本的な能力のひとつに数え上げられることが多く、欧米の大学では特にその育成に強い重点が置かれています。日本でも、その必要性和重要性はしばしば指摘されていますが、積極的に意見を述べることも、協調性や謙虚さを美德として評価する傾向の強かった日本の文化的土壌にあっては、論理的思考や批判的思考を育成することは難しいとされてきました。そうした事情もあって、「論理的思考」や「批判的思考」には、敷居が高い、固くて難しい、といったイメージがつかまっています。

そこで当センターでは去る7月10日(土)、できるだけ身近に、楽しみながら論理的思考・批判的思考を育てるメソッドを紹介す



教員、職員、学生が幅広く参加

るため、ワークショップ形式のFDフォーラムを開催いたしました。ワークショップのファシリテーターは、コミュニケーション学と教育工学をご専門とし、既に当センターの専門委員としてご協力いただいている牧野由香里教授(総合情報学部)です。牧野教授が開発された「十字モデル」を体験していただくことが、今回のフォーラムの中心となりました。

「十字モデル」のワークは、「ディベート」のような固い議論とはひと味違い、「対話」や「物語」をベースとする「やわらかい議論」を通じて、話し合いの筋道を可視化・構造化できるという特徴があります。ワークの中で、参加者たちの論理的思考を自然に促すようデザインされているのです。また「十字モデル」は、そこに安心して参加できる対等な場作りを支援する、という機能も持っています。参加者たちが対等に議論に貢献でき、また、お互いに安全な状況でコメントしあえるよう工夫されているので、相互のコメントを経由しながら参加者の批判的思考を育むことができます。

2時間30分にわたったプログラムは、牧野教授による「十字モデル」の解説と、実際に「十字モデル」を用いたのワークショップからなり、ワークショップでのディスカッションは、「電子書籍」をテーマにグループ単位で



ファシリテーターの牧野由香里教授

行われました。電子書籍は、KindleやiPadなどの登場によって今まさにブームを迎えようとしているタイムリーな分野であるということもあって、各グループのディスカッションは、和気あいあいとしながらも熱の籠もったものとなったようです。

高等教育の現状の中で、いかにして論理的思考や批判的思考を育成してゆか、は今後も大きな課題でありつづけるでしょう。しかし今回のフォーラムによって、ご参加下さった方々がこの課題に応じてゆくためのなんらかのきっかけが得られたとしたら幸いです。当センターでは、今後も先生方のニーズに即したフォーラムを開催してゆきたいと考えております。ご要望などございましたら、どうぞお気軽にセンターまでお寄せ下さいますようお願いいたします。

(教育推進部助教 須長一幸)

FD Café the 2ndを開催しました

9月9日に第二回新任教員研修会(FD Café the 2nd)を開催しました。コンセプトは前回と同様、Facultyづくりを目指した「共有」です。

授業をよりよいものにするためのヒントやアイデアは国内外を問わず、いくつかの大学において数多示されてはいますが、それらが必ずしも有用であるとは限りません。何故なら、それはある一定の文脈を背景あるいは下地として作られたものだからです。さらにそのヒントやアイデアは文字情報として得られるばかりだからでもあります。

わたくしたちの授業をよりよいものへと進化させるためには、そのような借り物に頼るのではなく、わたくしたち自身の手と頭をつかっただけのものを編み出さなければなりません。つまり、わたくしたちの現場、実情から出発する必要があります。それが、大切な「何か」を共有すること、あるいは共有できるという予感を持つことにつながると考えるからです。

したがって、会の開催に当たってはテーマを企画サイドがあらかじめ設定してから参加者を募るという手順を踏みませんでした。今回は春学期を終えた新任の先生方が授業においてどのような苦勞をされたか、いかなる工夫を試みたのかなどについて事前にお知らせ頂いた上で、多くの方に共通すると思われるテーマをその中から選定することにしました。取り上げるべき課題は多数ありましたが、諸事情を勘案した結果、「学生の私語について」ならびに「ワークショップ形式の授業運営について」を参加者による対話(ダイアログ)の中心的テーマとしました。

先に紹介したようにコンセプトは「共有」ですが、それは例えば私語対策やワークショップの効果的運営方法のマニュアル化を意味するものではありません。一人ひとりから報告された苦勞や工夫を参加者はそれぞれの文脈において理解し、それを基



情報共有を行う新任教員

軸として展開したダイアログの中で自身にとってのアレンジの可能性を探し、あるいはその可能性についてのコメントを求めると、さらに参加者の誰がどんな可能性を模索しているのかをそれぞれが確認し、それを自身のケースに引きつけて考えながら、「何か」を見つけられるようにすること、そのことにこそ意味があると考えて、今回はオープンエンドのスタイルを採りました。

できることならば年度内に第三回目の開催を企画したいと考えております。今までにご参加されなかった方でも、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

(教育推進部教授 三浦真琴)